

修士論文(要旨)

2010年 1月

要介護度の高いデイサービス利用者の
利用のきっかけとその後のプロセス

指導 芳賀 博 教授

国際学研究科

老年学専攻

207 J 6902

佐藤尚子

目 次

I	研究の背景	
1.	デイサービスをとりまく状況	1
2.	デイサービスの歴史と問題点	2
3.	デイサービスに関する先行研究	3
4.	研究目的	4
II	研究方法	
1.	調査対象者	5
2.	実施期間	5
3.	調査方法	5
4.	調査内容	5
5.	分析方法	6
6.	倫理的配慮	6
III	結果	
1.	利用者の概要	7
2.	カテゴリーおよび概念間の関係	7
3.	全体のストーリーライン	8
4.	カテゴリーの詳細	10
IV	考察	17
V	今後の課題	19
VI	まとめ	20

謝辞

引用文献

資料

I 研究の背景

1. デイサービスをとりまく状況

介護保険制度における要支援又は要介護と認定された者のうち、2007年末のデイサービスの利用は要介護4、5の介護度の高い者でも、要介護者全体の17.2%が利用している。今後、後期高齢者人口の増加にともないデイサービスの利用者および事業所数が増加していくことが予想されている。

現在のデイサービスでは、介護度の異なる利用者が、同一の場で類似のプログラムを提供されているのが現状である。この状況で、一人ひとりのニーズにあったサービスを提供することが困難となっている。

2. デイサービスに関する先行研究

利用者本人を対象としたデイサービスの効果に関する研究では、精神的・社会的変化の改善、機能改善、生活習慣の改善等があり、精神的活動が高揚するなどが明らかになったとする報告がある。デイサービスへの参加・継続及びその要因に関する研究では、プログラムの満足度で、送迎、入浴、給食、行事、健康チェックなどほぼ満足していた。中断の要因ではIADLが低い者が中断しやすいと報告されている。利用の抵抗感では、職員との信頼関係が介助の依頼に関係しているとの報告がある。また、デイサービス利用の家族介護者の介護負担感の軽減に効果を上げている。

しかし、先行研究には、要介護度の高いデイサービス利用者の個別のニーズを研究したものはない。

3. 研究目的と意義

要介護度が高く援助を受けることの多い高齢者が、どのような気持ちでデイサービスを利用しているのか。デイサービスに何を求めているか。を介護度の高い利用者の視点から、ニーズを明らかにすることで、今後のデイサービス・プログラムに役立てる。

II 研究方法

1. **調査対象者**：デイサービスを利用している介護度の高い利用者6名(年齢65歳～89歳)。2名ずつ3施設で行い、重度の障害がなく受け答えのできる利用者とした。
2. **実施期間**：平成21年8月～10月
3. **調査方法**：半構造化インタビュー調査を用いた質的研究
4. **分析方法**：録音したインタビュー内容の逐語録を作成し、修正版グラウンデッド・セオリーの手順に従って分析した。
5. **倫理的配慮**：施設と利用者に許可を得る。施設には、この研究は、施設や利用者の情報は研究以外では使用しないこと、利用者には、この研究の目的、回答は自由意志であること、回答を拒否してもデイサービスでの不利益は被らないこと、いつでも中止できることなどを施設と利用者にも書面と口頭で説明した。以上を含め桜美林大学の倫理規定に従った。

Ⅲ 研究結果

要介護度の高い高齢者の《デイサービスの利用の目的》には利用者が主体的に参加を希望する【利用者の意向】による場合と、主体性を持たずに家族の支持に従い【家族の意向】で参加をする2つの場合がある。利用者が主体的に参加を希望する場合は3つのパターンに区分された。1.介護保険制度の趣旨に基づき利用者自身で自己選択・決定し【利用者の意向】でサービスを利用するもの。2.家庭での居場所が無く自らの居場所を探したいという思いで参加する「居場所を求めて参加」の場合、3.家族の介護負担の軽減を目的とした参加がある。それに対し【家族の意向】で家族の支持に従い参加するものがある。一般的に要介護度の高い高齢者の場合は、家族の意向が強くサービス利用の決定権も本人よりも家族の意向が強い場合が多い。利用者本人はサービス利用の意向には主体性を持たず参加しているのが現状である。それに対して不満を持つのではなく、あくまでも家族の決定に従うことが、自分にとっての良い決定であるかのようにみうけられる。

デイサービス利用では《家族の状況と関係性》が基本にある。関係性が悪い場合は家族からの介護があてにできなかつたり、疎外感でデイサービスに通って来ざるを得ない状況になっている。逆に関係性が良いと家族に感謝をして、家族の介護負担の軽減のため自らデイサービスに通っている利用者もいる。サービスを受けた後、《デイサービスに参加しての利用者の認識》は【肯定的認識】【否定的認識】の2つに分けられる。【肯定的認識】ではリハビリや介護を受け、本人が満足しサービス利用の意向が強化されると、当初の参加が家族の意向であっても行きたいという本人の意向に変わる。その反面【否定的認識】の利用者は家族の意向のみで来ているため、自ら何かをしようとすることに積極的になれずデイサービスの満足度は低い状態であり、家族の意向の強いままである。

Ⅳ 今後の課題

- (1) 今回得られた結果が介護度の高い人の特性であるかどうか、軽度利用者との比較を通して検証することが必要
- (2) 利用者の意向の変化の過程は、利用者の振り返りからの結果であり、実際にそのような経過をたどるのかどうか、前向きな追跡調査も必要
- (3) 家族の意向については、利用者が思い描いている意向であるため、家族への調査による検証も必要

Ⅴ まとめ

1. 利用者の意向は、介護やリハビリ等を受けるだけでなく、居場所を求めたり、家族の介護負担に配慮しながら参加している。2. 介護度の高い利用者では、家族の意向で参加する割合が高いが、職員の対応・プログラム・リハビリ等が充実していると実感したり、楽しみと感じた場合には、利用者の参加意向が強化される。3. デイサービス利用の本人と家族の意向は、家族状況の関係性によって影響を受ける。4. デイサービスの参加に対して、本人が否定的な認識のままであれば、利用者の苦痛だけではなく無気力となる危険性もある。

引用文献

- 1)内閣府：平成 21 年版高齢化社会白書
- 2)厚生労働省：介護サービス施設・事業所調査結果の概況（平成 12 年～平成 19 年）
- 3)厚生労働省：平成 19 年度介護保険事業状況報告（年報）について
- 4)厚生白書 昭和 61 年版
- 5)厚生統計協会：国民福祉の動向 2008 年版.
- 6)竹嶋祥夫、足立 啓、荒木兵一郎：「デイ・サービスセンターの利用に関する研究－老人のサービス・メユー利用評価と身体的・精神的状況の変容について－」 『老年社会学』第 12 号、85-101 1990
- 7)稲葉佳江、中村真理子、深沢圭子、他：「デイサービス利用者の健康状態と通所状況に関する調査研究」『日本公衛誌』第 40 巻、2 号、105-114 1993
- 8)渡辺美鈴、吉田康久、河野公一、他：「デイサービスセンター利用者とその介護者の実態調査」『日衛誌』第 48 巻号、1 号、1993
- 9)渡辺美鈴、河野公一、谷岡 穰、他：「在宅要介護老人の心身および生活状況に及ぼすデイサービスセンターの効果について」『日衛誌』49 号、861-868 1994
- 10)山田紀代美、相原さおり、宮崎徳子：「在宅高齢者のデイサービスの利用に関する調査研究－虚弱群と障害者群の比較－」『日本看護学会誌』、第 5 巻、1 号、11-18 1996
- 11)中島 豊、奥山亜希：「老人・デイサービスセンターにおける利用者のニーズ－X 県 A 村における聞き取り調査から－」『生活福祉論集』4 号、15-27 2003
- 12)田代和子、杉澤秀博：「高齢者とその家族のデイサービスに対する総合的満足度に関連する要因」『日本在宅ケア学会誌』第 11 巻、2 号、30-38 2008
- 13)岡野初枝：「デイサービス中断の要因－女性の場合－」『岡山医誌』、111 号 51-60 1999
- 14)平賀睦：「要介護者におけるデイサービス利用への抵抗感の要因」『地域看護』33 号 90-92 2002
- 15)岩永俊博：『地域づくり型保険活動のすすめ.』 p 36 医学書院、東京、1995
- 16)木下康仁：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践【質的研究の誘い】. 公文堂、東京 1999
- 17)木下康人：ライブ講義 M-GTA－実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 公文堂、東京 2007
- 18)木下康仁： 質的研究と記述の厚み-M-GTA・事例・エスノグラフィ. 公文堂、東京 2009